

見えてきた春宮坊－皇太子を支えた役所－

1. 春宮坊とは

「春宮坊」は「とうぐうぼう」と読み、古代の律令制において「東宮(とうぐう)=皇太子」の政務や生活を支えた役所のことです。9つの専門機関から組織されており、皇太子の家政を分担して支えていました。

中国(唐)では「春坊(しゅんぼう)」と呼ばれ、「東」の方角は新しい時代を意味し、1年の始まりである春に通じるとされました。そうしたことから、皇太子の住まいを皇帝の宮殿の東側に置いていたのです。

平成8(1996)年、向日市鶏冠井町北井戸における発掘調査(長岡宮跡第329次調査)で、「春宮坊」と記された木簡(もっかん)が出土しました。調査地は、内裏(だいり)からみて北東にあたり、付近に春宮坊が所在したものと考えられます。

春宮坊	舎人監	舎人に関する事務一般
	主膳監	皇太子の食事の世話
	主蔵監	宝物の管理、衣服の製造
	主殿署	殿舎の清掃管理
	主書署	書・薬・筆墨紙硯の供進
	主漿署	粥および果物などの供進
	主工署	木工、銅鉄雑器の製造・修理
	主兵署	兵器や儀式用の道具の管理
	主馬署	乗馬や馬具の管理

■ は調査で確認できた役所名

春宮坊の組織図

2. 見えてきた春宮坊

平成8(1996)～10(1998)年にかけて、発掘調査(長岡宮跡第329・341・357次調査)が実施されました。調査地は現在、「鶏冠井かしの木公園」として市民の憩いの場所になっています。計3回にわたる調査によって、長岡宮域の東境である「東一坊大路」の西側溝を検出しました。そこには、質・量ともに豊富な遺物が捨てられていたのです。

こうした出土遺物を整理・検討したところ、

- 「内入物(うちにいるもの)」・「供 御料」・「御在」などと記された文字資料から、近隣に皇太子が居住していたこと。
 - 「春宮坊」・「主膳監(しゅぜんげん)」・「主工署(しゅこうしょ)」などと記された文字資料から、役所名と一部の機関名が分かったこと。
 - 「琥珀(こはく)・鼈甲(べっこう)・象牙・鈇物類」が出土し、工房で使用された可能性が高いこと。
 - 「琥珀・鼈甲」には破損した製品、加工段階の製品を確認した。正倉院宝物の装飾にも用いられた高級素材であり、春宮坊において皇太子のために「宝物級」の品々を製作していたこと。
- などの歴史的な事実が明らかとなりました。



遺物出土状況

3. 春宮坊が支えた皇太子

桓武天皇の宮都である長岡京。この時代には、2人の皇太子がいました。それは弟の早良(さわら)親王、そして長男の安殿(あて)親王(のちの平城天皇)です。

発掘調査では、延暦9(790)～11(792)年の年号が記された「木簡」が出土しており、春宮坊が支えた皇太子は、安殿親王であったことが分かりました。では、早良親王を支えた春宮坊はどこにあったのでしょうか。

昭和58(1983)年に実施された長岡宮跡第128次調査(向日市上植野町南開)で、「春宮」と記された「墨書土器(ぼくしょどき)」が出土しています。第一次内裏(西宮)からみて南東にあたり、この近くに春宮坊があったのかも知れません。



春宮坊の推定地

4. 出土遺物クローズアップ！

■黒色土器・三連杯

春宮坊の発掘調査では、珍しい遺物が数多く出土しています。とりわけ黒色土器(こくしょくどき)の「三連杯(さんれんつき)」は、これまでに類例をみない形状をしたものです。黒色土器は、土師器(はじき)の内外面に炭素を吸着させ、黒色をした奈良～平安時代の土器として知られています。三連杯は、内面だけを黒にした「杯(つき)」=料理を盛るための食器を3つ連結させた形状とみられます。

出土したのは中心部(連結部)のみであるため、本来の形状はよくわかりません。ただし、きわめて丁寧な調整(仕上げ加工)をしていることから、特殊な遺物であったことは間違いないでしょう。



出土品(右下)と復原品(左上)

■琥珀・鼈甲

春宮坊からは「琥珀・鼈甲」が出土しています。大半がいびつな小片で、これらは加工時にでた屑(くず)と考えられます。ただし、琥珀に半円形状の「加工品」や鼈甲には花びら状で中央に穴が開いた「破損品」も確認されています。このように琥珀・鼈甲を細かく見ると、原料・加工品・破損品・屑といった、さまざまな小片が混在していたのです。

琥珀や鼈甲は、正倉院宝物の装飾にも使われる高級素材でした。春宮坊には、銅鉄雑器の製造・修理をする「主工署」、宝物の管理をする「主蔵監(しゅぞうげん)」という機関がありました。具体的な物品は不明ですが、春宮坊で宝物級の品々を製造し、保管していた可能性が高いとみられます。

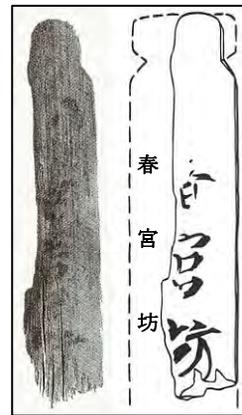


琥珀・鼈甲

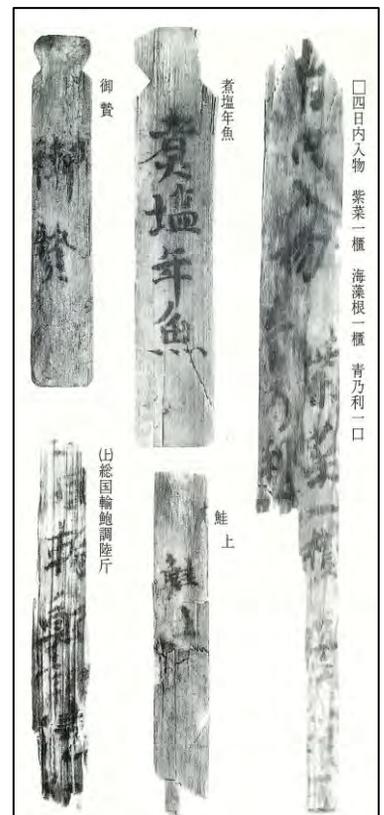
■木簡

「木簡」は、墨で文字を記すのに使用された短冊状の板です。大きく分けると①文書(もんじょ)、②付札(つけふだ)・荷札(にふだ)、③習書(しゅうしょ)・落書(らくがき)の3種類がありました。このうち春宮坊からは、貢進物=税として取り立てる物品に付けられた「荷札木簡」が多く出土しています。とりわけ、食事に提供された「食材名」を記した木簡は、皇太子の食生活を知る貴重な手がかりとなりました。

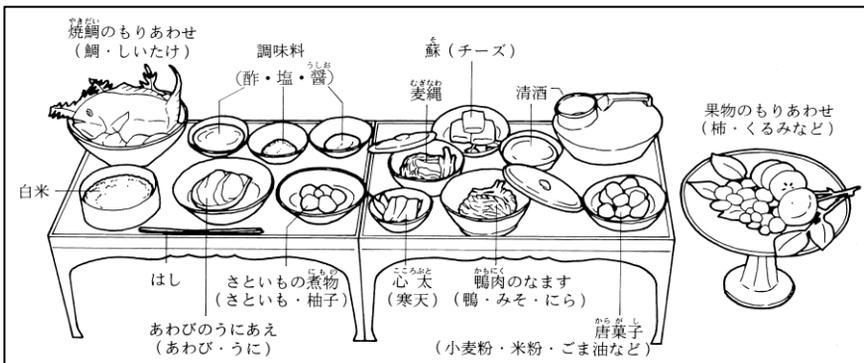
食材には海産物のほか、白米や塩などが確認されています。産地は上総国(千葉県)、常陸国(茨城県)、伊豆国(静岡県)、若狭国(福井県)、丹波国(京都府)、紀伊国(和歌山県)、淡路国(兵庫県)、肥後国(熊本県)など全国に及びました。



「春宮坊」と記された木簡



「食材名」が記された荷札木簡



〈参考〉貴族の食事